ロッシーニ・生誕200年を偲

Ro

あるイギリスの評論家は、かつてロッシーニのことを〝怠け者の作家〟と呼んだ。「彼は音楽を寝床の中で作曲し、浮世の楽しみを心ゆくまで味わい、食卓の喜びを満喫したいばかりに、中年期に入ると早々に楽壇を引退した」と論評した。

若いころから何でもたらふく食べたり、飲んだりした。世界中から、例えばペルーなどからさえも、思いもおよばぬような良い酒を手に入れるための苦心をした。そして後年になって自分の酒倉のことを人々に自慢した。

とくに彼はボローニャの産物を好んだという。パリ在住中、彼をもっとも喜ばせたものは、故郷の友人たちが彼のもとへ時折送り届けてくれるいろいろの種類のチーズやハム、ソーセージであった。これらの品は、ロッシーニ自身、その友人たちのひとりに手紙を書いているように、「世のどんな勲位や勲章や十字章などより、ずっとありがたいもの」であった。

とくに彼は食べものの調理法についておおいに興味をもっていて、もっとも好んだ料理は、「パテ・ド・フォアグラ」であったそうである。フランス料理にも彼の名前が冠されたものが現在も残っており、「トゥールネド・ド・プフ・ロッシーニ(ロッシーニ風ヒレ肉の薄切りフォアグラ添え)」、「ウ・プルイエ・ロッシーニ(ロッシーニ風いり卵のフォアグラ添え)」、「プラルド・ロッシーニ(ロッシーニ風鶏のフォアグラづめ)」、「ガルニコール・ロッシーニ(ロッシーニ風鳥肉のつけ合わせ)」など、ロッシーニ風と名のつく料理がこのほかにもいくつかある。